6月23日　慰霊の日　特集

戦跡を歩く11

72年前の束辺名（つかへな）では何があったのか

沖縄戦終結から72年を迎え、戦争体験者が少なくなるなか、沖縄戦の記憶をいかに引き継ぐかが課題となっています。シリーズ11回目の今回は、束辺名で沖縄戦を体験した当時12歳の少女の体験を紹介します。

戦前の束辺名での生活

実家は農家だったけど、父や兄が荒崎の崖下に泊まり込みで魚捕りにも行っていた。捕った魚は母が真壁まで歩いて売りに行っていたね。きょうだいは兄が1人、姉が3人、私は末っ子。母と三女姉さんと私、兄の家族と嫁いでいた長女姉さんとその子どもが一緒に暮らしていた。私は学校から帰ったら子守り。

学校は喜屋武国民学校に通っていた。防空頭巾をかぶって学校の東側の山に入ったが今考えれば避難だったと思う。「空襲警報聞こえてきたら…」って歌もあったよ。

近づく戦争の足音

空襲警報のサイレンが鳴って、避難するときには、姪をおんぶして壕に走って。大変だったよ。母たちが畑にいてもそれぞれ避難して壕で会うことになっていた。警報で避難している頃は壕の中までは入らなかった。すぐ解除されたから。

ミーガーウィーの壕で

戦争が激しくなり、家族とミーガーウィーへ避難。ここは東辺名の人がみんな入れるくらい大きな自然壕で、深くて中でろうそくを点けても上からは見えなかった。壕に入るときはロープをつたって降りた。水も山から滲みてちょんちょん出る。束辺名まで水を汲みにいくこともあったはずだが、私は分からない。食料も水も姉たちが準備してくれた。芋は家で炊いていたかもしれない。

私は壕から出なかった。みじめな生活。12歳だから苦労もわかる。いつもおんぶしていた姪はナチブサー（泣き虫）でね。一人が泣いてアメリカに見つかったら大変でしょう。「アメリカーに見つかったらデージドー」と兄嫁と姪は近くの小さな壕に移動した。ご飯は姉が運んでいた。そういうこともあったね。

ミーガーウィーを追い出される

米兵が来る前にミーガーウィーから追い出された。「出なさい」と言ったのは友軍の兵隊じゃなかったかと思うね。兄は区長だったから、「自分たちが先に出ないと他のみんなも出ないから」と家族で最初に出た。それから喜屋武岬の望楼の下に行った。昼は歩けないから夜に移動した。アメリカが撃った照明弾があがると草むらに伏せて。

喜屋武望楼のすぐ下へ避難

望楼の下は戦前からよく行っていたから知っていて、海から弾が来ても跳ね飛ばすくらい大きな岩の後ろの穴に入った。壕が上等だったから、弾が飛んでくることもないし音もそんなに聞こえなかった。夜になったら姉たちが家で食事を作って喜屋武岬の壕に運んでくれたから、壕では食べるだけ。あのときはどうやってでも行ったり来たりしていた。

アメリカの船が見えるようになると、船からずっと「デテコイ、デテコイ」と放送があった。「アメリカーが来たから山原に逃げよう」となってね。

アメリカの旗が…

望楼に上がったら大変だった。あれは思い出したくもない。倒れている人があっちにもこっちにも。アダンの所で倒れてそのまま死んでいる人も見た。死んでしまったように見える親の上に子どもが乗っていて…。自分たちも命懸けだからどうしようもない。今でもあの子たちはどうしたかなと思う。

ちょうど十五夜お月様が出ていた。福地の前の方に2メートルくらいの山があってね、「今日はここで休もう」と一泊。この時に次女姉さんの旦那さんが防衛隊から帰ってきた。山に捨てられていた缶詰を見て「これはどの部隊の缶詰だ」と分かったから食べた。飢えているから美味しかったよ。

もう夜が明けていたはず。南波平の後ろに着いたら、戦車断崖にアメリカの旗が立ててあった。これを見て「もう通れないから白旗を立てよう」と、旗みたいなものを作って。ここから捕虜取られたんじゃないかね。

収容所での生活

最初の収容所は覚えていないが、その後は古知屋開墾に。山原はカズラがいっぱいあったから、1斗缶で炊いてボロボロジューシーを作った。怖いのも分からないから、浜で藻やンナグワー（小さな巻貝）を採ってきてこれも食べた。

名城の浜に移動させられてからはコンセットヤーの学校に通った。教科書もない。遊び半分で先生の言うことを聞かないウーマクターだったね。

束辺名へ

束辺名へはすぐには帰れず、福地の西側、糸洲の前あたりの広場に束辺名と上里の人が一緒に暮らしていた。水も糸洲のカーから汲んで飲んでいた。しばらくここで生活して束辺名に戻ったよ。

家族は全員ケガも病気もなく無事だった。でも、束辺名に戻ったら屋敷の境目は分かるけど、家も何もない。

戦争はもう嫌

子どもたちにも戦争の話はしたことはない。話しても「まさかそんなこと」としか考えられないはずと思って。もう戦争はないほうがいい。戦争だけはねえ…。自分たちがこうして体験しているから。戦争だけはもう嫌だね。

インタビュー

1933(昭和8)年生まれ。束辺名出身。三和中学校1期生。現在は子や孫に恵まれ充実した日々を過ごしている。これまで子どもたちにも沖縄戦の記憶を語ることはなかったが、子や孫に同じ思いをしてほしくないという思いを込めて語ってくれた。

マエハラ
前原 ナツさん

沖縄戦における糸満市の情報は「糸満市史 資料編7 戦時資料上巻」「同下巻」で紹介しています。
問い合わせ　生涯学習課
☎840・8163

喜屋武望楼跡

旧日本海軍が設置した海軍望楼の一つ。見張や艦船との通信、気象観測などを行った。喜屋武望楼は日露戦争を契機に設置され、沖縄戦前にはセメント二階建ての建物があったという。現在は喜屋武岬園地として整備されており、地元の人はこの一帯を「ボーロー」と呼んでいる。

糸洲のミーガー

集落後方にある字糸洲のムラガー。現在は屋根や支柱はコンクリート製で「復興乃泉」と記されている。かつては飲み水として使用され、糸洲のンブガーでもあった。終戦直後には、束辺名、上里の住民の生活も支えた。